福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

カリキュラムをどのようにデザインするか
カリキュラムデザインを構成する6つの次元

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松木, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/5424

I

カリキュラムをどのようにデザインするか

カリキュラムデザインを構成する６つの次元

松木健一

1．３年間を見通したカリキュラムデザインと学校文化

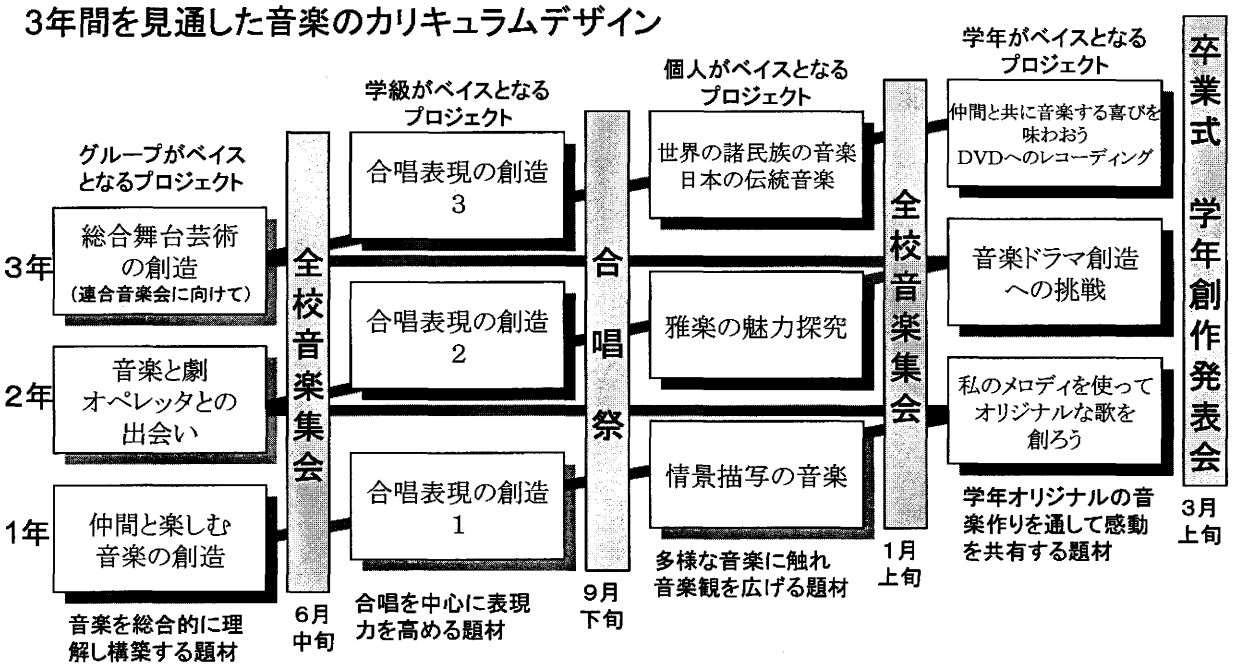
福井大学教育地域科学部附属中学校の授業研究の牽引役を担ってきた教科の１つは音楽である。しかし、中学校教育の中で音楽という教科がおかれている立場は決して堅固なものではない。指導要領の改訂に伴い音楽は教科の時間が削減されていた。こういった状況に対応しつつ、音楽教科として大事にしたい学力を高めていくのにはどうしたらよいか。その一方で、他の教科が求める学力との共通する部分を自覚的に整理することで、他教科と連携を図りながらも、21 世紀の知識基盤社会が求める子どもの学力を高めていくためにはどうしたらよいか。担当者１人の音楽教科が、学校内で孤立することなく教員集団の中で位置づき、一丸となって子どもの学習活動を支えていくのにはどうしたらよいのか。これらの問いの解をみつけることが、柳伸明教諭及び前任者の北典子教諭の切実な課題であったように思われる。

まず彼らが着手したことは、特別活動と音楽教科との一体化である。削減された音楽の授業時間をカバーしつつ、附属中学校の音楽の水準を維持していくためには、音楽教科と学校行事に連続性を持たせること、つまり、音楽教科が学校文化の中に包摂され、子どもたちの日常生活の中における音楽活動を豊かに

することである。むしろ、教科としての音楽は、それらの日常の音楽活動をサポートし、時には牽引し、さらには深める役割として再編されなければならない。

手始めとして、修学旅行プロジェクトの中に音楽ドラマが位置づき、旅行先で音楽ドラマを発表する活動（1999）が、3年間の学校行事の中に取り入れられ恒例化していった。また、福井市の連合音楽会での発表や、校内で定期的に開かれる音楽集会での発表などが、音楽の授業と密接に結びついていった(2004)。特に音楽集会や合唱祭は、全校の生徒が参加している。柳教諭は、学年ごとに表現される音楽の発表内容を音楽教科のカリキュラムに定着させた。これによって生徒は、「来年は自分たちにどのような内容が予定されているのか」先輩の発表を聞くことで明確にすることができる。と同時に、先輩の発表を超える表現をしたい、あるいは、先輩とは異なる表現をしたいという想いが、音楽の授業に参加する生徒の中に育ってきた。世代をつなぐ学びのサイクルが実現してきたわけである。探究し、創造し、表現することが、次の世代の探究の契機となる、そういった連鎖がはじまった。附属中学校ではこのようにして、全校生徒を前にした表現の場と音楽の授業を媒介に、学年間で継承し発展させる音楽文化が定着してきている。

さらに柳教諭は北教諭のカリキュラムを引き継ぎ、音楽で学習される内容を精選させ、1年間に学ぶ内容を4個のプロジェクトに再編した。加えて、1学年から3学年までを4つの時期に分けられていたカリキュラムを、6月の音楽集会、9月の合唱祭、1月の音楽集会、3月の卒業式と学年創作作品全校発表会の4つの表現機会を柱とする１２個のプロジェクトに再編した（注1)。そして、各学年が同じ時期に同じ音楽分野や領域の学びを行えるように配列させることで、定期的に行われる音楽集会などが、各学年で学び合い刺激し合える場となる状況を作り出した。たとえば4月から6月のプロジェクトは、音楽を総合的に理解し、構築する題材である。6月から9月は合唱を中心に表現力を高める題材、10月から12月は多様な音楽に触れ音楽観を広げる題材、そして、学年オリジナルの音楽作りを通して



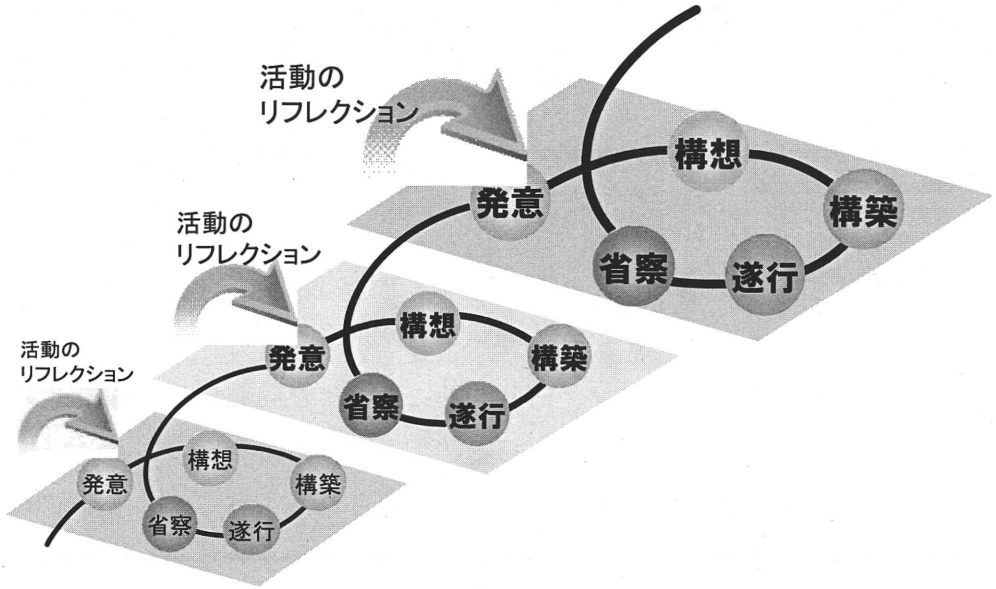
感動を共有する題材である。こうして３学年と４つの音楽分野を縦軸と横軸にした３年間を見通したカリキュラムデザインが構築されていった。

このカリキュラムデザインでは、同じ時期に各学年が同じ分野や領域の音楽題材を学び、それによって、音楽集会で各学年同士が刺激し合うことができるわけである。さらに、新たな学びへの動機が喚起されるように、学年間で音楽の背景の広さに差異のある題材が取り上げられるようになっている。学年があがるに従って、背景となる音楽文化の歴史的・民族的・文化的拡がりを見せるように工夫をされているわけである。１年の春に仲間と楽しむ音楽の創造をしていた生徒は、２年の春でオペラと出会う。オペラ「アイーダ」を鑑賞し、舞台芸術の奥深さを知ることになる。主題の達成に向かって活動を展開するプロジェクトにあっては、主題の構想を拡げるとき、創作活動が行き詰ったとき、創作された作品を省察するとき等に、しばしば鑑賞教材が導入されている。その鑑賞教材は、音楽としての歴史的・芸術的・文化的背景を持っており、生徒は自らの創作活動と同一線上で音楽文化の深さを垣間見ることが出来るようになった。

学習主題に向けて展開する協働探究プロジェクト

1年に行われる4個のプロジェクト、つまり3年間に行われる12個のプロジェクトは、それぞれ学習主題が設定されている。生徒はその主題の達成に向けて探究し、創造する活動を展開することになる。そして、全てのプロジェクトでは到達内容を表現する場が与えられており、その表現によって学年内や学年間で相互評価が生まれ、学年間で生成継承するつながりが見られるようになっている。

実践-省察-再構成のサイクル(学びのプロセス)



1つ1つのプロジェクトを見ると、主題の提案⇒構想⇒構築⇒遂行/表現⇒省察のサイクルが編まれており、その省察が新たな構想⇒構築⇒遂行/表現を生み、活動の再構成を促している。この3年間を見通したカリキュラムデザインでは、個人の探究をベイスに展開するプロジェクト、グループ活動をベイスにするプロジェクト、最終的に学級全体の創作をめざすプロジェクト、さらには、学年全体の創作をめざすプロジェクトがある。そして、そのいずれの場合でも、主題の提案⇒構想⇒構築⇒遂行/表現⇒省察のサイクルが存在している。

例をあげると、個の学習活動をベイスにする秋のプロジェクトでは、主題の提案⇒構想⇒構築⇒遂行/表現⇒省察の展開は、各個人が中心なって行われている。但し、各個人の構想や表現をグループや学級全体で受けとめ、感想を述べ合う場が用意されており、それを経て再度各自の創作活動に戻っていく構造になっている。一方、学級(夏)や学年(冬)をベイスにするプロジェクトでは、グル

ープ単位の創作活動を相互に評価し合いながらより大きな単位である学級や、さらには学年の創作活動に発展させている。従って、主題の提案⇒構想⇒構築⇒遂行/表現⇒省察のサイクルも、サイクルを重ねるに従ってより大きな母集団をベイスとする活動に発展するようになっていく。こういった活動を支えるのは、協働の学びである。一人の学びが他者の学びを援け、他者の学びが自らの学びを促すことを認識できるようなコミュニケーションの機会がカリキュラムの構造の中に仕組まれている。表現や省察の機会がより大きな集団とのコミュニケーションの機会となっている。さらに、学年活動のような大きさになると、もう音楽の授業内では収まらなくなってしまい、より一層の協働の重要性が高まることになる。生徒の中で合唱祭等の担当係りが決まり、係りが教諭と打合せをしながらリーダーとなって、授業や学級や放課後の時間を活用し学級をまとめ、学年へとつないでいく。こういった活動は、音楽の授業の枠を越えた役割分業と相互評価による協働が実現しない限り展開できないプロジェクトである。

また、附属中学のカリキュラムデザインの面白いところは、各個人が中心となっている活動から、順次拡大し、最終的に学年の活動に拡がるというような拡大型一方向的カリキュラムになっていないところである。１２個のプロジェクトがグループになったり(春)、学級になったり(夏)、個になったり(秋)、学年になったり(冬)と、何度も伸縮を繰り返しながら３年間過ごすところに特徴がある。音楽は時には技能教科だとも言われる。確かに、各自の技能の習熟なくしては、優れた創作活動は展開できまい。しかし、はじめに技能ありきでは、生涯音楽としての音楽教科も成り立ちにくい。各自の技能の高まりが集団の活動を豊かにし、集団の活動が個人の技能の習得を促す仕組みが必要なのであろう。柳教諭のデザインは周到に技能中心の音楽教育を避けつつ、それでいて個人の技能習得への動機を喚起するデザインとなっている。

ところで、各プロジェクトでは省察に基づく再構成（主題の提案⇒構想⇒構築⇒遂行/表現⇒省察のサイクル）が行われ、自らの活動内容の振り返りが、活動を推し進める原動力となっている。この振り返りは、日々の活動の振り返りもあれば、プロジェクト全体の振り返りになることもある。さらにプロジェクトの積み重ねを踏まえた省察になるときもあろう。特に、３年間通じて春・夏・秋・冬の同じ時期に、同じ音楽分野の題材が配列されていることから、学年を超えて振り返ることが起きやすいカリキュラムになっている。振り返ることは、

音楽の内容に限定できるものではない。なぜなら音楽の学習活動が各自の主体的な取り組みによって成り立っているために、振り返ることは、取りも直さず生徒自身の有様を振り返ることにつながってくるからである。つまり、音楽の活動を通して定点観測のようにして3年間の自分の成長を見つめ易いからである。本来、学習活動は自分づくりでなければならい。学ぶことは変わることだからである。このカリキュラムの特徴の1つは、ショートスパンから順次ロングスパンの振り返りが起きやすくなっていることであろう。

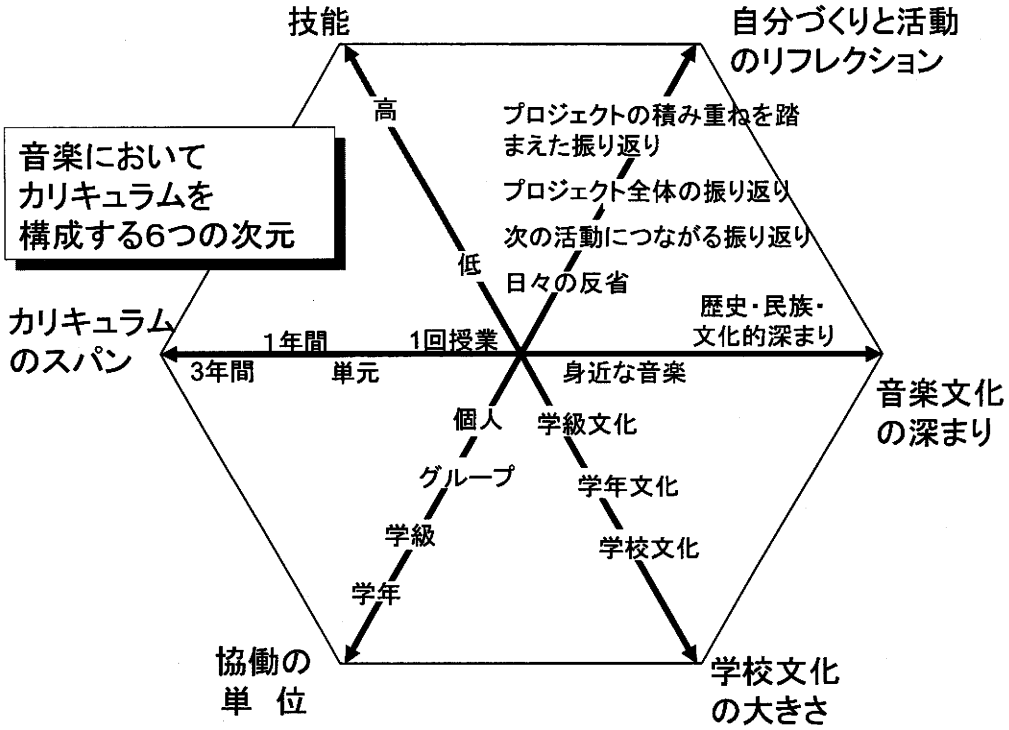
2. カリキュラムデザインを構成する6つ次元

これまで附属中学校音楽教科のカリキュラムの構造を述べてきた。その中で明記してきたカリキュラム構成の次元を改めて整理しよう。1つは、カリキュラムのスパンの次元である。単元のような短いものからここで取り上げているようなロングスパンのカリキュラムまで存在するであろう。ここで取り上げた音楽教科のカリキュラムは、3年間を見通したロングスパンのカリキュラムだからこそ可能になった活動が多々ある。特に学び合う学年のサイクルは長期の見通しなくては成立しないであろう。

これに関連する2つ目の次元は、学校文化の次元である。少ない音楽の授業時間を遣り繰る発想から、学校文化に拡がる音楽活動、それを支える音楽の授業への発想の転換が音楽を豊かなものにした。学校の文化づくりを念頭に置くか、単発的な授業に視点を置くかによってカリキュラムは異なってくる。

3つ目は音楽文化の深まりの次元である。身近なところでの音楽の出会いから、音楽の歴史的・民族的特徴に視野が拡がることで音楽の文化として芸術としての深まりを感じる

ことが出来るカリキュラムまで可能であろう。



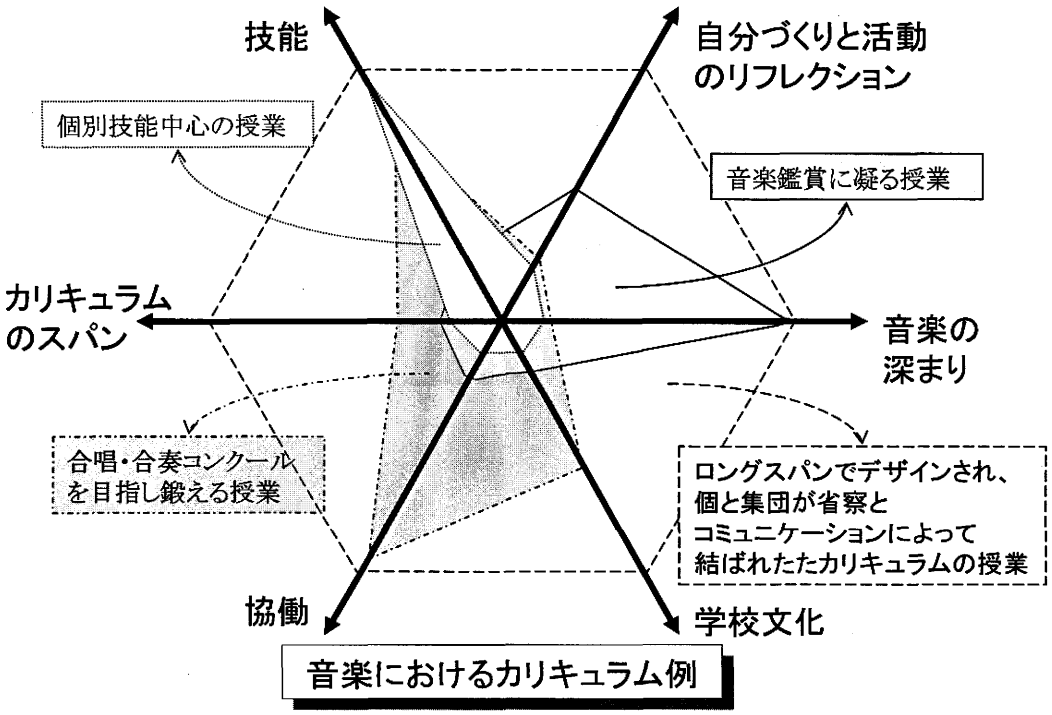
4つ目は、音楽を通して培われる協働の次元である。音楽の創作活動は探究コミュニケーションなくしては成立しない。しかし、一方で音楽の授業を個人レッスンのように個人の技能を磨く活動として位置づけることも出来なくはない。カリキュラムの中で協働をどのように位置づけるか。カリキュラムのデザインを構成する大きな次元となろう。

5つ目は、技能の次元である。協働の活動と個の活動が組み合わさる中で、各自の技能が高まることが求められよう。技能の向上を抜きにしては、カリキュラムはつくれない。

最後6つ目の次元は、自分づくりの次元である。主体的な音楽活動を通して成長する生徒の姿を明確にカリキュラムに位置づけることが重要であろう。

ここで取り上げた6つの次元を図に表してみた。図の中には特徴的なカリキュラムのパターンを描いてみた。技能習得中心のカリキュラムや合唱合奏コンクールをめざしたカリキュラムなどである。描いてみるとそれぞれのカリキュ

ラムの不足部分に気づくことが出来る。附属中学校音楽教科が提案するカリキュラムを検討すると、ここで示した6つの次元でカリキュラムがデザインされていることがわかった。この6つの次元はカリキュラムをデザインするときの視点を提供するものとなろう。



（注1）

北教諭は、全校が聞きあうことのできる合唱祭を柱に4つの時期（第1期：入学から1年次の合唱祭まで、第2期：合唱祭を経験してから、2年次の合唱祭まで、第3期：2年次の合唱祭を経験してから3年次の合唱祭まで、第4期：3年次の合唱祭を経験してから卒業まで）に分け、合唱祭という学校行事と音楽の授業を連動させ、3年間を見通したカリキュラムを作成した。柳教諭はこれをさらに発展させ、春夏秋冬に行われる4つの音楽的行事に向けて各学年の音楽の授業が展開するカリキュラムに再編した。

引用文献

1999　「探究・創造・表現する総合的な学習」東洋館出版社　福井大学教育地域科学部附属中学校研究会著

2004　「中学校を創る―探究するコミュニティへ―」東洋館出版社　福井大学教育地域科学部附属中学校研究会著